

編集後記

この数年間縄文文化の研究の視点がずい分かわってきた。その傾向は基礎から理論へ、実証から統計へ——より科学的方向への指示という点での進歩が著しい。更に一方では実験考古学という視点での研究がおこなわれ、土器、石器の製作から、植物採取の問題まで多種類の方法が実施されている。こうした学問の傾向は、当然関連科学の応用という点で内容がいちじるしく豊富になっているが、その取りあつかい方に注意が必要になってくる。当然整理やあつかいに不注意な点が出てきて、その都度大目玉を頂戴することもある。

学問というのは、研究の態度より、その結果が大切であるらしく、結果次第では大へん厳しい。しかし、考古学では、たまたま予知しない結果がでてくることがあって、それを何人も否定することができない場合がある。だから結果が大切だとはいつても、それはあくまでも「現在の配罫」とどまるのである。そういう意味で、考古学は可成りの分野に、ロマンチズムが残されていると思う。私は、むしろ、ロマンズムがあるから考古学という学問をえらんだので、統計や理論が好きであつたら理科系統に進むか、哲学でも専攻していたであろう。そういう意味で私はいくら言はれても、私の考えを変えようとはしないし、これからも思ったとおりのことをやってゆくつもりである。だが大切なことは、歴史は人間がおこした事件を追求する学問であるから、その基礎的事実に誤りがあってはならぬと考える。

橘昌信氏の船野遺跡の調査報告と論考は、洪積人類の遺産という課題で、残された石器の考証から、想像する生活の歴史である。それを層考的に科学検討を加えるのは遠藤尚氏の地質学的考察である。坂田邦洋氏の縄文後期の新しい文化の想定も技術や芸術に対する追求であって、科学や、数学では計算し割りきれぬところが多い。そうした意味で、この度の3氏の研究は、興味深く、必ず多くの研究者によつて利用されることになるものと信ずる。ここに「考古学論叢」3号を出版するにあたり、執筆者各位に深甚なる敬意を表し度い。（賀川）